吉田松陰の忠の思想

東中野 修 道

今世紀を代表する哲学者の一人と言はれるスペインのオルテガの名著『大衆の反逆』は一九三〇年（昭和五年）に発表されるや、たちまち各国語に翻訳されて、今日では現代社会の問題を鋭く別抉した社会哲学上の名著として播るべき地歩を占めてゐる。オルテガが警鐘を鳴らし重大視した問題の一つは、曾てデモクラシーとは法の規範とルールを厳しく守る事であり反対者とともに政治を行ふ事であったが、今や二十世紀の大衆はあらゆる手統きを飛ばして直かに行動に訴へる事を信条とし、さうして自己の好みと意見を物理的圧力の行使により人々に強制してゐるといふ今日日常茶飯事の由々しき事態であった。

このオルテガの指摘は一見したところ戦後日本の松陰研究を考へていく上で何の關係も有してゐないかのやうに見える。しかし戦後日本の松陰解釈は、私たち自身が二十世紀に生きてゐるといふことも手伝つてか、知らず知らずの裡に、或いは意識的に、反逆する二十世紀大衆のかかる特質を、松陰のなかに、大なり小なり追ひ求めようとしてゐたところに、その大きな特徴があつたかに思ふ。

(一)

その嚆矢は、『近代日本社会思想史一』（昭43）に発表された故橋川文三氏の「忠誠意識の変容」という論文であつた。忠と言へば、『広辞苑』も説くやうに、一般には真心を尽して忠実であることを意味し、其処から、特に、武士の倫理として主君にたいしては専ら臣下として献身的に尽すという没我的な君臣關係が意味されてきた。しかし氏の新解釈はかかる伝統的な忠誠観とは全く相反するものであつた。氏は、松陰の忠誠心について、「自己の強烈な信念によつて、時として不忠不義とみなされるような異常な行動をも辞さないことこそ、真の忠誠であるという決断を前提としている」と判断し、その根拠として、「松陰自身は、そのような忠誠のラジカリズムを『用猛』¹⁾という言葉で表現している（『二十一回猛士の説』）と解釈した。

それから、『日本思想大系 54 吉田松陰』（昭53）に「解説」を執筆した藤田省三氏は、△忌諱に触れることを恐れぬ「異議申し立

て」の精神 $\vee$ と $\wedge$ 団体意識の迷蒙を破る「横議・横行」 $\vee$ に、松陰の思想の「普遍的意味」がある²⁾と断じた。

更に本郷隆盛氏の「幕末思想論」(昭56)も、『講孟余話』のなかの松陰の言葉と典拠に、 $\wedge$ 松陰の臣道は(中略)通俗的に理解されているものとはまったく異なり、往々にして自己の内的確信にもとづく主義・主張を主君に対して強制するものであり、それを強制する論理 $\parallel$ 通路が「忠」なのである $\vee$ といふ解釈を打ち出した³⁾。

既にお気づきの方もおありかと思ふ、表現に違ひこそあれ三氏の松陰論には或る一定の共通性が認められて来る。言ふなれば、自己の強烈な「信念」なり「確信」を、絶対的な判断基準として、何物をも恐れることなく、幕府や藩府の決定事柄に対し、絶対不服であると異議を唱へ、自分自身の確信を「強制」すべく、「横議横行」する、それが松陰の本領であり、それが松陰の考へる理想的な忠誠心であった、——かかる認識の類型が浮び上がった。

仮にこのやうな松陰像が正しいのであれば、そこから浮び上がって来るものは外ならぬ精神分裂病の重症患者松陰に外ならない。松陰が獄や自宅塾居中に猛烈に読書したことは『猛省録』(嘉永五年)等に知られてゐる。自ら言ふやうに、好んで書を読んだ松陰は、書物を通じて往時の忠臣孝子や義人烈婦の事蹟を知っては喜び、感動しては泣き、喜んで躍り上がった⁴⁾。そのことは往年の松下村塾々生も回想してゐる。講義中の松陰は忠臣孝子が身を殺して節義に殉ずるといった件りに至るや、両眼いっぱい涙をため、声をふるはせ、時には熱い涙を点々と本の上に落したといふ。また逆臣が主君を苦しませるやうな件りに至れば、まなじりは裂け、声は次

第に大きくなって、「怒髪逆立」するやうであつたから、門人もまた自然と忠臣孝子の没我的猷身的態度に涙を落し、臣下にあるまじき悪逆な行為にたいしてはこれを憎むといふ心を起したといふ⁵⁾。

松下村塾にあつては、師弟ともに、伝統的な忠誠観に立つてゐたことが、ここに語られてゐると言つて何の不都合もない。にもかかはらず三氏の描く松陰像はそれと百八十度真向から反してゐた。はたしてそれは原文に忠実な批評であつたのか、或いは松陰の具体的事跡に立脚した立論であつたのか、もう一度松陰の文章と事跡に即しつつ検討してみることが必要となつて来る。

(二)

既に述べたやうに故橋川氏は自説の根拠として松陰の「用猛」といふ言葉あげ、松陰自身「忠誠のラジカリズム」なるものを「用猛」といふ言葉で表現してゐると語つた。そこで当然「用猛」といふ言葉とその意味が問題となつて来る。

用猛といふ言葉は『己未文稿』(安政六年)正月七日の項に「用猛⁶⁾誠つて餘す十七回」(全集第五卷一三六頁)といふ風に、七言絶句の漢詩の第二句として唯一出て来る。その最後に、「二十一回生、亡邸・上書・入海・再獄と、平生猛を用ふること凡そ四、猶ほ十七を餘す」といふ松陰自身の書き込みがある。それから四ヶ月が経過した安政六年五月、幕府が松陰を取り調べたいから江戸に送るやう長州藩に命じたをり、松陰は再び「平生猛を用ふること凡そ四たび⁷⁾」と書いて、更に「今猶ほ十七回を餘す、故に此の詩を作る。時に己未の歳なり。其の五月、関左の行あり、想ふに當に復た一猛

を用ふべきなり」(第九卷五七五頁)と記す。正月と五月に同じことが書かれてゐるが、そこに窺へるのは「用猛」にかける松陰の意気込みであり、松陰が三十年の生涯において五回にわたって「用猛」を行ったといふ事実である。故橋川氏が松陰自身「用猛」といふ言葉で「忠誠のラジカリズム」なるものを「表現している」と語るのは独断にすぎない。「用猛」の意味を判断するには、氏も言ふやうに、安政元年四月執筆の『幽囚録』のなかにある有名な「二十一回猛士の説」が資料として妥当かと思ふ。ただそこには「用猛」といふ言葉は見えない。

「吾れ庚寅の年を以て杉家に生れ、已に長じて吉田家を嗣ぐ。甲寅の年、罪ありて獄に下る。夢に神人あり、與ふるに一刺を以てす。(その)文に曰く、二十一回猛士と。忽ち覺む。因つて思ふに、杉の字二十一の象あり、吉田の字も亦二十一の象あり、吾の名は寅、寅は虎に屬す。虎の徳は猛なり。吾卑微にして孱弱、虎の猛を以て師と爲すに非ずんば、安んぞ士たることを得ん。(中略)神人蓋し其の日に益々孱弱、日に益々卑微、終に其の遂ぐる能はざらんことを懼る。故に天意を以て之れを啓きしのみ。(後略)」(第二卷八七頁)

松陰は、卑微にして孱弱だから、このままでは何事も成し遂げることなく一生を終ると自戒し、事に当るに、虎の「徳」たる虎の「猛」を以てせねばならぬ、——さう語つた。といふことは、「忠誠のラジカリズム」なるものを、「猛」と表現したのではなかつた。では△猛を用ゐること√が「忠」に当ると考へてゐたのかどうか、そこで次に松陰自身の心事が問題となつて来る。

松陰が用猛第一回目に挙げてゐるのは「亡邸」である。南部藩の内紛のため獄死した兄の敵討ちに行く江幡五郎に途中まで同行を求められ、松陰は出発の日を赤穂浪士討入の十二月十五日と約束した。しかし今日のパスポートに当る「過書」が国元から江戸の松陰の手元に届かない。それでも松陰は約束の前日の嘉永四年(一八五一年)十二月十四日に江戸の藩邸を亡命し水戸へと旅立つ。「不忠不孝の事、誰れか肯て甘んじて之を爲さん。(中略)誠に丈夫の一諾忽せにすべからざればなり」(第九卷一六六頁)と『東北遊日記』の冒頭——つまり出発当日——に書き、真に亡命に至らざるを得なかつた理由と、その意味する重大性について記した。また『東北遊日記』の末尾には、「吾が罪万死猶輕し」(同二七三頁)と書いた。この「亡命」により、松陰は、士籍を剥奪され、浪人の身となる。

次は用猛第三回目を問題にするが、安政元年(一八五四年)三月、松陰は金子重之助と下田から米艦に乗り込み海外渡航を企てる。しかしペリーの拒絶にあつて成就せず、松陰は柿崎村の名主に自首した。重之助ともども下田番所に連行され、与力たちに糾されて、松陰は、「海外に往き、万国の情形を詳審し、以て國家の爲めに膺懲の大策を立てんと欲するの意」を述べた。思ひだにしなかつた事件に、与力たちは為すすべを忘れ、「愕々色を失ふ」。まさに青天の霹靂であつた。松陰は重之助と「声を齊うし」て、「万死自ら分とす、一事隠す所なし、願はくは筆を掲げて是れを記せよ」と語り、速やかに調書を取るよう勧めるありさまであつた。江戸の獄で正確な調書を取られたあと、松陰は「永訣」の意をこめて、兄に

「此の後は刎首に相成り候ても遺憾之れなく候」(第七卷二三五頁)と便りしてゐる。それから五年後、刑死の間近なことを意識し始めた松陰は、安政六年十月二十日頃と推定される「諸友に語る書」に、「吾れ甲寅の擧、自ら萬死を分とす。圖らざりき、幕府寛貸^{かんだい}以て死せざるを得たり。」と往時を振り返った。「忍び候て乗り渡る者これ有るに於ては、其の者は死罪」といふ鎖国令は、ゆめ忘れたことがない、五年前のあのときに晒し首となつてゐて当然だった、——さう回顧する松陰に、鎖国令といふ掟を否認する態度はおろか、否認することを以て真の忠誠であるとする決断も、皆目見当たらない。

松陰の藩邸亡命と下田踏海を評して、故橋川文三氏は、「いづれも表面藩庁の命に背き、幕府の法を無視した行動であるようにみえるが、松陰自身の心中では、むしろ(さうではなく——筆者註)それらのラジカルな行動こそ『事成れば上は皇朝の御為、下は藩主のためになるべく』という究極的な忠誠の発動として決行された」(前述書一四八頁)と論じた。しかし松陰は「藩邸亡命」を「不忠不孝の事」とみなし、「下田踏海」において幕府の法を無視したが故に「自ら萬死を分とす」と考へ続けて来たのである。これらの「用猛」が「究極的な忠誠の発動として決行された」とは到底言へない。「事成れば上は皇朝の御為、下は藩主のためにもなるべく」と松陰が言つてゐることは、成功すれば引いては天皇を上にしたたく日本のためにもなるばかりか、毛利公の誉れにもなると言つてゐるに過ぎない。従つて究極的な意味ではない、あくまで二義的な意味合ひしか付与されてゐない、——さう解するのが自然である。

松陰は藩命に背き幕府の大典を犯した廉を、内心の沁刻な事実として受け止めた。しかし、さう言つただけでは、無論足りないのである。安政二年の『三余説』に、松陰は、「性已に狂悖にして多く大典を犯し、質又厄弱^{やくじやく}にして數々疾に罹る。ここに一もあらば、皆以て身を殺すに足れり。而るに方且に余恩を仰ぎ、余光を取る。是れ人生の余命に非ずや」(第二卷三一七頁)と語つた。松陰は「下田踏海」を萬死にあたひする行為と受け止め、それ以降の人生を、「余命」と見たのである。この松陰の内心の沁刻な事実を忘れて思へば、その後の松陰の激しい生き方など、到底理解できない。松陰は「狂」的になつてしまつたと、「狂」の一字でもつて片付けられかねない。しかし松陰が真に狂人であつたならば、自己を「狂」と意識することなど、到底でき得る筈もなかつた。

(三)

次は用猛第四回目にあたる松陰の「再獄」であるが、松陰が老中の間部を要撃する策に移らうとしてゐた矢先、松陰を投獄せよとの藩命が下つて、松陰は下獄した。その間の経緯については、安政五年十二月三十日の『投獄紀事』に、「政府僕を以て獄に投ず。而して罪名あるなし。(中略)即ち僕の獄に投ずるは蓋し其の身を殺するなり。豈に早々にすべけんや。然りと雖も吾れ獄を畏るるに非ず。誠に罪名をして明白ならしめば欣然として往かんのみ」(第四卷五〇〇頁)とある。罪名のない入獄は「終身の最後」(第八卷一四九頁)であつたばかりではない。いかに江戸時代であらうと、その不当極まりないことに、変りはなかつた。松陰は罪名を明らかに

するやう、藩政府、殊に周布政之助に詰め寄った。

さうは言つても、「間部要撃策」は、「横議」「横行」の好い例ではないかといふ異論があるかも知れない。しかし「横行」とは『国語大辞典』（小学館）にもあるやうに、勝手気ままに申し歩き、ほしほしにまにはびこることを言ふ。「横議」とは勝手に論議することを言ふ。「間部要撃策」は勝手な議論といふより、一命を賭した行為であった。実行に移されてゐたならば、横行どころか、多勢に無勢で、松陰たちは老中警備のものの手で斬り捨てられてゐたことであらう。或いは、桜田門外で大老の首を討ち落した有村次左衛門のやうに、目的を果したあと自決してゐたことであらう。

また、明治になつてから小田村伊之助が松陰「畢生の大策」（別巻四三〇頁）と呼んだ『伏見要撃策』にしても、参勤中の藩主を伏見に待ち受け、勤皇を説いて、藩主を先頭に勤皇に立ちあがらうとしたものであった。だから横議横行ではなかつた。しかも、伏見要撃策も、間部要撃策も、実行に移されなかつた計画であつたといふことをゆめゆめ忘れない方がよい。藤田氏の「解説」が松陰の「横議横行」に松陰の思想の「普遍的意味」を求めたその横議横行の具体的証跡は、ここに求めることも到底出来ないのである。松陰は横議横行といふよこしまな精神に立脚などしてゐなかつた。だからこそ、評定所の取り調べにおいても、「大抵の事は明白に申し立て奸正の御糺しを相願ひ、奸人と対決の手段が宜敷しく」（第八巻三八二頁）といふ、抑制の効いた、しかも敵しい対決姿勢が最後まで貫徹された。また判決に際しても松陰は異議を唱へなかつた。そのことは後に述べるが如くである。

次は松陰の用猛第二回目にあたる「上書」であるが、松陰は嘉永六年米艦の浦賀来航を聞くや直ちに浦賀に直行し、『將及私言』を著して藩邸に提出し、これが藩主の栄覧に達した。その喜びについて、松陰は、晋作に、「小生に於いては感激身に餘り此の世に生きては居られ申さず候。剩あまつさへ昨年已来又々恩旨を蒙り候」（第八巻二二七頁）と書き送つた。引用文中の「恩旨」とは、幽囚中にもかかわらず何時でも上書するやう伝へ聞いたことを指す。藩命に違背して亡命し、なほかつ海外渡航といふ万死にあたひする罪を犯した身ながら、吾が公からは身に余る恩顧を蒙つた、その感激が、「此の世に生きては居られ申さず候」といふ深い報恩の言葉となつて表出した。そしてまた、「本藩の恩と天朝の徳とは何如にしても忘るるに方なし」（第八巻二九三頁）といふ表現となつた。何度書いても、思ひは尽きぬ、さういつた趣がそこにはある。

ところで『講孟余話』尽心上篇第四十六章によれば松陰は存命中に、既に、周囲から、「極論直言する者を不敬と号し、（中略）天下国家を憂ふれば蘇秦張儀と号す」（第三巻三六七頁）といふ風に非難されてゐた。従つて、今日、松陰の思想の「普遍的意味」を「横議横行」に見る意見が出て来ても、あながち不思議ではない。しかし松陰の上書は藩主の栄覧に達するといふ異例の恩典に浴してゐた。そればかりではない。藩主もまた松陰の上書を歓迎してゐた。そのことを思へば、松陰が「横議」したとはここにおいても言へない。「上書」の一件を以て、松陰は自己の内的確信にもとづく主義主張を君主に強制した一例と見ることも出来ない。松陰は上書のとほり政策を実行せよと強要したこともなかつたのである。

最後に用猛第五回目にあたる松陰の「至誠」の実験を残すのみとなつた。安政六年七月、江戸の伝馬町の獄において幕府から取り調べられた折り、松陰は、得心の行かなかつた孟子の「至誠にして動かざる者未だ之れあらざるなり」といふ言葉を身を以て試さうとする。そこで、「此の行我れ敢へて吾が冤を訴へんや」（東行前日記五月二十四日）と決断して、松陰は至誠の実験に向ふ。刑死の前日に書き上げた『留魂録』が述べてゐるやうに、真心が幕吏に通ずれば生きることにならう、通じなければ死ぬことにならう、どちらにしても、それが天命だ。さう考へて松陰は天に総てを委ねた。

しかしさう言つただけでは無論足りないのである。「願はくは岳爺を学んで我が年を終らん」（東行前日記五月十六日）と漢詩に詠んでゐるやうに、松陰の「此の行は吾が死所」（同五月二十日）といふ思ひに揺ぎはなかつた。既に述べたやうに、松陰の生涯は、用猛第三回目に降、総てが収斂するやうに死の一点へと向つてゐる。それが「屈平の一死も思ひ留まり候は、かかる時勢切迫の節に一命差捨て御用に相立て度き存念のみにて候間、（中略）此の度は一身を以て国難に代らねばならぬ事疾に落着仕り居るなり」（「愚案の趣」、第五卷三二八—九頁）といふ静かにして強い表現を生んだ。松陰は死ぬために生きてゐた。だからこそ至誠の実験も敢行できた。さう付言せねばなるまい。

松陰は秦檜のために殺された岳爺に学んで「我が年を終らん」と願ひながらも、魯仲連のやうに、幕府の議論を一変させることがで

きるやもしれないと後者に一纏の望みを賭けたのである。安政六年七月九日第一回目の訊問で、松陰にかけられた嫌疑が氷解するや、直ちに「寅死罪二あり」と開陳し、かねてから「暗誦」してゐたといふ「應接書」に則つて、幕府の外交方針の拙劣さを「逐一辨駁」した。もし幕吏が「聽を垂れて天下の大計、當今の急務を辨知し、一二の措置をなさば」、墨夷は必ずやそれに心服して引き下がり、神州興の好機が到来しよう、さうなれば「望外の又望外」、死ぬことになつても松陰は「光りあり」と見た。もしまだ逆に幕吏が怒つて死刑の判決を下せば、幕吏の追及の手が親戚朋友にも延びて行くであらう。それは見るに忍びないが、それもまた「昇平の惰気を鼓舞するに足る」と見た。つまり一身にとつては吉でも凶でも、松陰にとつては、国難打開のうへで「皆妙」であつた。いづれになるか、やってみなければ分らない。孟子の言ふ「至誠」を以て幕吏に語りかけたのであつたが、つひに、幕吏を動かすこともできず刑死に至つてしまつた事は余りに有名だ。

しかも評定所の死刑の判決に際しては松陰は一言の不服の申し立ても——即ち「異議」の申し立ても——しなかつた。逆に、「本望」（第八卷四一—四頁）と受け止めた。そしていよいよ首を斬られるといふ瞬間にあつては、首を斬つた当の首斬り浅右衛門が感嘆してゐるやうに、「悠々と歩を運んで来て、役人共に一揖し、『御苦勞様』と言って端坐した。其の一絲乱れざる、堂々たる態度は、幕吏も深く感嘆した」といふ程、実に見事であつた。序でに付言しておけば、伊勢の神官世古格太郎の『唱義聞見録』を典拠に、判決申渡時の松陰を評して激しく判決に抗弁したといふのは、完全な読み

違ひではあるまいか。注意深く読むならば、松陰が判決にたいしてではなく「下袴」(下の袴もしくは褌)姿に縛り上げられた事にたいし抗弁してゐる姿が、原文からは浮かび上がって来る。「彼れ縛る時(筆者註、彼れ判決時、ではない)誠に氣息荒く切齒し、口角泡を出す如く、実に無念の顔色なりき」(第十卷三三四頁)であつた。幕府は護送の途中で松陰を奪回されるやも知れぬと案じて、奪はれても追捕しやすいうよう、松陰を下袴の姿に縛りあげた。下袴の姿(恐らくは褌姿?)に縛り上げられては、誰しも無念の念を禁じ得まい。松陰でなくとも、激しく抗弁したことであらう。

(五)

さて以上明らかなやうに、五回にわたる松陰の「用猛」を仔細に検討してみても、本稿冒頭に紹介した三氏の所説を裏付ける具体的証左はどこからも出て来ない。

また松陰は往々にして自己的的確信にもとづく主義主張を主君に「強制」したと論じられたその事実も見当らない。そればかりか、強制する「論理」ないしは「通路」が真の「忠」であるといふ論理ほど、松陰から程遠かつたものはない。本郷氏が判断の典拠とした『講孟余話』離婁上篇第十一章において、松陰は、「人々其の親を親とし、其の長を長として、天下平かなり」といふ孟子の言葉を論評して、「若し君君たらずと云へども臣臣たれば天下尚ほ平かなり。臣臣たらずと云へども君君たれば天下尚ほ平かなり。此の処工夫の入る所なり」(第三卷一五六頁)と論じた。その松陰の解釈に注目して、氏は、「松陰においては、君主も家臣もそれぞれがそ

れその地位にともなう職分をいわば相手の意向などにはお構ひなく、一方的に尽すことこそが問題なのであり、(中略)したがって、松陰の忠は君主の意思への絶対的あるいは盲目的な服従では決してなかった」(傍点原文、前述書三八五頁)と断じた。はたして松陰が氏の言はれるやうに「相手の意向などにはお構ひなく一方的に尽すことこそが問題」と考へてゐたのであれば、そのやうな松陰の見解は「人々其の親を親とし、其の長を長として、天下平かなり」といふ孟子の見解に矛盾してゐると言はねばなるまい。しかも松陰がさう考へてゐなかつたといふことは、刑死三ヶ月前の松陰が、晋作に、「若し君側にも御出なれば深く精忠を尽し君心を得べし。然る後正論正義を主張すべし」(第八卷三六八頁)と、今後の生き方を論じてゐることからも明らかだ。松陰は相手の意向にお構ひなく一方的に尽すことを説いたことなど一度もなかつた。ご参考までに全集第三卷『講孟余話』から引用すれば松陰は次のやうにも説いてゐる。

「暴君頑父に事へて忠孝なる者に至りては不幸の至り、誠に悲しむべし。然れども是れに非ざれば真の忠孝の誠意を観るに足らず」(一七〇頁)

臣下が「親戚・君臣・上下を亡(なみ)(筆者註——無視)する」(三五〇頁)ことは松陰のもっとも戒めたところである。「君相の暗」は、誠心をつくして、臣下の「補ふ」(二一六五頁)べきところであつた。無論、暴君暗君に誠心誠意仕へることは誠に「悲しむ」べきことだ。しかしかかる絶対的臣従のもと暴君暗君に献身的に仕へてこそ、初めて、其処に、臣下の揺るぎなき忠が客観視され得る。

だから松陰は「是れに非ざれば真の忠孝の誠意を観るに足らず」と言ふのである。臣下の忠が主君に通じるまで、どこまでもどこまでもこのころをくだいて、臣下が主君に真心を尽す道、それが松陰の考へた忠の道であった。だからまた松陰は「達とは註に、此れに足りて彼れに通ずるなりと云へり。積行累徳、人に感孚することなり。臣忠足りて君に通じ、君是れを信じ、（中略）の類なり。」（三四〇頁）とも言つてゐる。忠とは、臣の真心が十分となつて君に通じ、臣の忠が君に信じられるまで、献身的に尽す道であつた。

臣下が主君に絶対的に従ふ、——それが松陰にあつては忠の思想の核心を成し、微動だにしてゐない。しかも、この絶対的に従ふといふことを大前提にして、初めて、主君を諫めるといふ武士としての諫争の行爲も生じて来る。臣下に忠の心がなければ、初めから諫めることなどせず、下剋上に出る。忠誠心に僅かでも私欲があれば、諫めることは、諫めたついでに主君を廢するといふ反逆の論理に行きついてしまふ。だから、主君を諫めるといふ行爲は、絶対的忠誠心を大前提にして、初めて正当化され、両者は、常に、対を成す。さうでなければ容易に反逆者への道が開かれることは火を見るよりも明らかだ。松陰にあつては「君意信ずべからず」と称して自説を主張し君主に強制するやうな臣下は、安政六年三月の入江杉蔵宛書簡（第八卷二五三頁）に見られるやうに、主君を「不君」と申し觸らす「不臣」と映じてゐた。何よりも君臣感応の世界を松陰は自他ともに求めてゐた。その思ひが一方では「元来朋黨は人臣上を無みするの心より起り候」（第八卷三十頁）といふ憂へとなつて表はれ出た。そしてまた、「己が不臣を偽りて君を不君と申し觸ら

す奴等、何ともかとも罵り様なし」（全集第八卷二五三頁）といふ深い嘆きとなつて表はれ出た。更にまた、「同徳同心君臣一体なるは何より日出度き事」（第七卷三八八頁）といふ喜びとなつて表現された。

「假令首を刎ねられても吾が公不君と申す事は得申さず」（前述杉蔵宛書簡）と立腹する松陰にとり、「乱臣賊子の龜鑑」（第三卷二二六頁）は、後漢最後の献帝を擁しつゝ、終に自己の主張を押し通して野望を貫き、自ら魏王と僭称して天子の車服を犯した曹操であつた。「今や尊攘を以て迂謬と爲し、忠孝を以て陳腐と爲す」（第五卷一七一頁）ご時勢にあつて、忠臣の龜鑑は、追放した先帝の孫（暗君）を再び迎へ容れた伊尹であつた。その伊尹の「志」にたいする松陰の解釈に端的に窺ひ得るものこそ、ほかならぬ絶対的忠誠心あつて初めてこそ諫めることも可なりといふ思想であつた。そしてまた、それなくしては王位の篡奪に墮するといふ、揺るぎなき確信であつた。

『講孟余話』尽心上篇第三十一章（第三卷三四六—七頁）によれば、殷の湯王の宰相伊尹は湯王なきあと即位した太甲（湯王の孫）に無法行爲を見て、太甲を追放した。しかし民は大喜びであつた。数年後、太甲が猛省して改心したことを知るや、伊尹は再び太甲を呼び戻して政治を執らせた。すると民はまた大いに喜んだといふ。この伊尹の故事を例に、公孫丑は、孟子に、賢者の仕へた君主が実は暗君であつたといふとき賢者としてはこの暗君を追放するのがよいのかと質した。それに対して孟子は、伊尹のやうに先づ第一に世の中が乱れることなく穏やかに治まつていくのを願つて、暗君で

もひとたび悔悟するや直ちに迎へ容れる志が確固として在るのであれば、勿論追放してもよい。が、その志なくして追放するのであれば、永久に追放することにはかからぬから、王位を篡奪したことになる——即ち「伊尹の志あらば則ち可なり。伊尹の志なくんば則ち篡へるなり」と疑問の余地なく答へた。

松陰はこの孟子の言葉に着目して語る。伊尹のやうに臣下が絶対的な忠誠を内心に默契してゐるのか、あはよくば自ら主君にとつて代らうと野心を燃してゐるのか、胸に手をあてて真に考へてみれば直ぐにも分ることだ。絶対的忠誠心に欠ける乱臣賊子はこの孟子の言葉を見て身震ひするであらう、——即ち「一語乱臣賊子をして骨寒からしむ。眞に身を設けて其の地に置かば自ら知らん」——其処に、松陰は、孟子の一語の現実的威力を見た。直ぐに続けて松陰が「此の語の功、豈に夫子麟經（筆者註、孔子の麟史すなはち春秋）の下に居らんや」と論評してゐるのが、その何よりの証左である。しかも更に続けて、「此の義、万章下篇末章貴戚の卿、君の位を易ふるの下に於て割さつ記す。往きて見るべし」と記し、もう一度「君の位を易ふる」といふ箇所にさかのぼつて自分がどう論評してゐるか見て欲しいと読者の熟慮を促す。其処に、松陰自らが、何よりもこの問題をいたく重視してゐたことが窺へる。

万章下篇末章（第三卷三三四—三五頁）において、孟子は、齊の宣王に、国王の大きな過ちを何度諫めても国王が聞き入れないといふ時、国王と同姓の大臣に於ては暴君を追放し王位を一族中の賢者に移すが、異姓の大臣に於ては国を去ると説いた。これにたいする松陰の論評がまたいかに松陰らしい。要するに大臣たるも

の、同姓異姓にかかはらず国家を憂ふる事このやうでなくてはならないが、王位を移すことと国を立ち去ることとはあくまで「權」（常道に反する一時的処置）で、もし「常経」（常に人の守るべき正しい道筋）を論ずるとすれば、「諫めて死するあるのみ」であると言ふ。松陰にとつて武士として取るべき道はど、こまでも、「諫めて死するあるのみ」であつた。

ところが、松陰に、疑義を投げ掛けたものがあつた。それでは王位を篡奪し国王を弑逆することになりかねない。聖賢の言ふ言葉ではない、削るのが当然だ。またどのやうなときに王位を移してもよいのか。——さう質されて、「孟子曾て言あり、伊尹の志あれば可なりと。一語已に盡せり」と松陰は端的に答へる。一時的な便法として追放した暗君を、再び迎へ入れるやうな一片の私心もない伊尹の志さへあれば、王位を替へてもよく、仮に替へたところで、篡奪と弑逆には至り得べくもない。だから、「一語已に盡せり」と松陰は言ふのである。では伊尹の志とは何か。「伊尹の志は国家を憂ひ生民を憂ふるのみにて、一点の私心あるに非ず」であつた。松陰は、告子下篇第二章において、「凡そ人の人たる所は私心を除去するにあり」と語る。そしてまた尽心下篇首章においては、伊尹の志から離れて私心に立つてゐることはないか、内心にさう問はない日はない——即ち「余平生伊尹の任を以て志とす」と吐露する。松陰は、臣下として、主君には、絶対的に服従するという伝統的な忠義の思想に立脚してゐた、——さう言つて何ら問題はない。このやうな松陰における「伊尹の志」を最初に指摘したのは故河上徹太郎氏の名著『吉田松陰』であつた。

かかる極めて伝統的な忠誠観に、更に松陰にあっては、安政六年一月十一日の「某宛書簡」にあるやうに、「忠義と申すものは鬼の留守の間に茶にして呑むやうなものでなし」(第八卷一八三頁)、「勤王のきの字を吐きし初めより、小弟素より一死をはめての事なり」(同一八六頁)といふ死んで忠をなすといふ思ひが加はつて来る。これは、一つには、安政元年の下田踏海以来、亡友金子重之助と、亡くなったと誤伝されてゐた黙菴、この兩者にたいする松陰の「大丈夫の死ぬべき時に死にもせで」(第五卷一四六頁)といふ思ひ、或いは「平生吾死友に負く」(第八卷二七八頁)といふ消しがたい痛恨の念に由来するものであった。

そしてまた一つには、君臣感応の世界に生きることを自他ともに求めて来たその当然の帰結として、藩主の恩愛に報ずるといふ家臣本来の人間の想ひに由来するものであった。つまり君臣關係が抽象的に考へられてゐたのではなかつた。あくまで、具体的に、現実の天皇ないしは藩主との、極めて個人的な、こころの通ふ体験に基づいて考へられてゐた。安政五年の『戊午幽室文稿』中の「益田彈正君に上る書」(第四卷三五二—三五三頁)の冒頭には、松陰兵学門下にして藩政の中枢にゐた国相益田彈正が、松陰の兄の梅太郎にたいして、周布政之助を通じて語つたといふ言葉が、そのまま記してある。それによれば、彈正が、松陰の著述である『狂夫の言』『対策一道』『愚論』を藩主に奉つたところ、藩主は彈正に次のやうに語つたといふ。——上書は松陰の心の自然に赴くところであるか

ら、身分不相応として却下してゐたのでは、幽囚の身の松陰は発狂するやも知れぬ、採扱は自分にあるのだから、意見があるのであれば書いて提出するやう常々誘つて、松陰の言はんことを欲するところを上書させ、松陰の心を鼓舞するに越したことはない、「卿其れ之れを謀れ」——かかる藩公の異例の思し召しが国相から松陰に伝達された。

同じく『嚴囚紀事』によれば、藩公は、彈正から手渡された「國中の論策」のなかに、松陰の『狂夫の言』を発見し、「是れ寅二郎の手抄に非ずや」(同四六六頁)と尋ねたといふ。明らかに、見覚えの松陰の筆跡に、毛利敬親の眼が止まつたと言ふよりほかはない。伝へ聞いた松陰は次のやうに受け止めた。

「僕之れを聞きて、感激骨に徹し、涕泗の霑ふを覚えざるなり。僕の迂魯、果たして何の取る所ぞ。而も、閣下の過聽ここに至る。況や僕一たび藩律を犯し、再び幕典に忤ふ。罪惡深重にして、死して余罪あり、果たして何の恕する所ぞ。而も閣下の特有ここに至る。」(同四六六頁)

「僕一たび藩律を犯し、再び幕典に忤ふ」とは、東北亡命と、下田踏海を指す。このあと松陰は更に続けて、「吾が身罪あり、明公之れを宥ざる。吾れ何物ぞ依然として勵まざる。吾が身は斃すべし、志は挫くべからず」と記した。「身は斃す」べく松陰はひたすらに生きて、安政五年十一月六日には生きながらにして「家大人・玉叔父・家大兄に上る書」といふ永訣の書さへ書いた。安政六年四月、「吾れ豈に今公の恩を忘れんや。此の恩御当代に報せぬは万々遺憾なれども、いづれ尊攘の為に死んで差上ぐるなり」(第八卷三

二一頁)と語る松陰は、「いづれ尊攘の為に死んで差上ぐるなり」といふいのちささげておこなふ忠の思想を生きているのである。

松陰にあつては君臣関係が抽象的に考へられてゐたのではない。

あくまで具体的に個人的な間柄において考へられてゐた。そのこととは孝明天皇の場合にあつても同じことであつた。安政五年六月

一日と二日の梁川星巖宛書簡によれば、松陰は、星巖に、『対策一道』『愚論』『統愚論』を送つてゐる。それが星巖から孝明天皇の

乙夜の覽に供された。そのことを伝へ聞いた喜びが先の「家大人・玉叔父・家大兄に上る書」に綴られてゐる。

「向に愚論数道を以て之れを梁川緯に致す。緯竊かに上青雲の上を濟す、蓋し、乙夜の覽を経たりと云ふ。一介の草莽区々の姓名、

聖天子の垂知を蒙むる、何の榮か之れに加へん。兒の死する何ぞ晚きや。(中略) 兒豈に死せざるべけんや。」(第四卷四三一—二頁)

死ぬのがおそいといふ松陰の思ひに一片の虚飾もなかつた。孝明天皇の外患にたいする深いご憂念を、吾が身に賭けても晴らさうといふ捨身の精神と、時代閉塞打破の使命感とによつて、その一念はますます強くなつて行く。前者は、東行前日記の扉に、「かけまくも君の国だに安からば身を捨つること賤がはいなり」(註、はいとは本意の意)といふ和歌となつて表現された。後者は、「去年三月

巳来、天子獨憂、何如にして臣子一人の死なし」(第八卷二八五頁)となつて表現された。刑死の一週間前、「諸友に語る書」の冒頭に松陰が書いたことこそ、本懐を遂げつつあるといふ安堵感であつた。「吾れ甲寅の挙、自ら万死を分とす。図らざりき、幕府寛貸

以て死せざるを得たり、是れ今日宜しく幕府の為に死すべきのいな

り。甲寅の後、幽囚せられて国に在り、而も吾が公眷願衰へず。是れ今日宜しく吾が公の為に死すべきの二なり。加之、^{しんのみならず}聖天子宵衣旰食、夷事を軫念したまひ、^{かそつ}去年来の事豈に普率の宜しく傍觀坐視すべき所ならんや。是れ今日宜しく天子の為に死すべきの三なり。三の宜しく死すべきありて死す、死すとも朽ちず。亦何ぞ惜しまん。」(同四一九頁)

松陰にあつては、忠の思想の実践は、大願成就の死であつたといふことになる。事実、既に述べたやうに、松陰は死罪であるから「本望」であると語つてゐた。それほどに「思ひ定め」てゐた死の旅路への「出で立ち」であつたから、首を斬られるに及んでも、首斬り浅右衛門にたいし「御苦勞様」の一言がつひ口を衝いて出てきた。さう言ふよりはかはない。

註

- (1) 橋川文三「忠誠意識の変容」(古田光/作田啓一/生松敬三編『近代日本社会思想史』(『近代日本思想史大系第一巻』)、有斐閣、昭和四十三年)、一四八—一九頁。
- (2) 藤田省三「書目撰定理由——松陰の精神的意味に関する一考察」、既述書六〇七頁。
- (3) 本郷隆盛/深谷克己編『近世思想論』(有斐閣、昭和五十六年)、三六八頁、三八六頁。
- (4) 『講孟余話』告子上篇第七章、全集第三卷二四九—五〇頁。なほ全集は大和書房刊の『吉田松陰全集』(昭和四十七年)に依拠した。

(5) 天野御民『松下村塾零話』、全集第十卷三五―一頁。

(6) 『回顧録』、全集第九卷三七―二頁。

(7) 松陰における「狂」の意味についてはハインリッヒ・デューモン『吉田松陰』（東中野修道編訳、南窓社、昭和六十三年、平成三年）中の「松陰私論」、同書一七八頁、参照。

(8) 「高杉晋作宛書簡」、安政六年七月九日頃、全集第八卷三六〇―二頁。

(9) 「松村介石所説」大正十三年、全集第十卷三二―六頁。なほ松陰の最期については拙稿「吉田松陰の最期」（『亜細亜大学教養部紀要』第四十号、平成元年十一月）、参照。

(10) 既に弘化二年十六歳のとき「人の忠を問へるに答ふ」（全集第一卷四八頁）において松陰は「忠の道は承順に非ず、趨走に非ず、惟だ中心のみ」と答へ、善を述べて主君の邪心を封じ、難しい先王の道の実行を主君に求めることが、「忠の大なるもの」と考へてゐた。松陰において忠とは形式ではなかつた。あくまで心中の事実、忠の核心があつた。

(11) 河上徹太郎『吉田松陰』（文芸春秋、昭和四十三年）、殊に「講孟余話四」参照。

(12) 絶対的な忠誠心があつて初めて諫めることも可といふ松陰の忠の思想は、また天皇にたいする松陰の基本的な態度をも成してゐる。従つて山口宗之氏の「吉田松陰の天皇観」（『日本思想史学』第十五号）の結論とは逆に、これがまた松陰に「承詔必謹」の態度をも貫かせてゐると言つてよい。氏が判断の典拠とした「綸言汗の如しとのみ一概に申詰め候はば、

矢張り一偏に落ち申すべく存じ奉り候」（『統愚論』）といふ松陰の一文にしても、全体の脈絡からすれば異なつた解釈が生ずべきか。そのことについてはいづれ稿を改めて論じてみたいと思ふ。

(13) 有名な松陰の絶筆である「此の程に思ひ定めし出立はけふきくこそ嬉しかりける」といふ和歌からの引用、全集第六卷三七―三頁。なほ松陰の死が大願成就の死であつたといふことについては拙編訳『吉田松陰』中の「松陰私論」一八〇頁参照。

（亜細亜大学助教）